

# 黒船参

## 映画文学人生論

3006) 学問のすすめ 福沢諭吉  
3007) 三酔人経綸問答 中江兆民  
3008) 求安録 内村鑑三  
3009) 「マクベス評釈」の緒言 坪内逍遙  
3010) うき草 二葉亭四迷訳 ツルゲーネフ原作  
参考：黒船・海の祭礼 吉村昭

嘉永六年（一八五三）六月二日――

梅雨の季節もすぎ、江戸湾の湾口に突き出た三浦半島をおおう樹木の緑は、日を追って濃さを増していた（吉村昭『黒船』）。

昨日と変わりない平凡な一日と思えたが、後からふりかえってみると、日本人にとつてはもの見方や価値観が根本的にひっくりかえる歴史の大きな変わり目の日だった。

それは文字の歴史からみれば、西暦一世紀頃からの漢字伝来に匹敵する変化だ。進歩的な啓蒙思想家たちは、漢文や蘭語に加えて英語、フランス語、ドイツ語など西欧の言語を学んで、人々を啓蒙する必要に迫られた。

当時の啓蒙思想家たちの著書を読んでみると、西欧思想が受容され、普及していった道筋のようなものがかすかに見えてくる。

学問のすすめ

福沢諭吉

三酔人経綸問答

中江兆民

求安録

内村鑑三

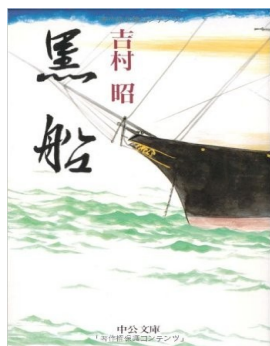
「マクベス」評釈の緒言

坪内逍遙

うき草 ツルゲーネフ原作

二葉亭四迷訳

江戸時代の学問は、文学即ち儒学で、和歌、俳諧、戯作の類は文学にふくまれていなかった。福沢諭吉のいう学問は実学であり、戯作の類は文学にふくまれない。



# 黒船参

映画文学人生論

それに対して、実学とはいえない小説や戯曲の地位を近代文学の域にまでたかめようとしたのが『小説神髓』の坪内逍遙と『浮雲』の二葉亭四迷と言われる。今回はその裏付となる逍遙の『マクベス評釈』の緒言』とツルゲーネフ原作四迷訳の『うき草』を読み、すこし納得した。

中江兆民の『三酔人経綸問答』は、三人の酔っ払いが天下の御政道について勝手な議論をかわす政治論で、江戸時代ならまちがいなく発禁処分を受け、著者は投獄される。キリシタンご禁制の時代なら内村鑑三『求安録』も同じ運命だろう。

諭吉、兆民、鑑三、逍遙、四迷——この五人の啓蒙思想家に共通するのは漢学の素養に加えて外国語に通じていたことである。諭吉はオランダ語と英語、兆民はフランス語、鑑三は英語、四迷はロシア語の達人だった。

言語を異とする外国との外交交渉には通詞（通訳）が欠かせないが、啓蒙思想家と比べると通詞は地味な存在で、ほとんど知られていない。

その通詞の運命を描いたのが吉村昭『黒船』と『海の祭礼』。ペリー艦隊との交渉で主席通詞をつとめたのは堀達之助だが、後に森山栄三郎に代わった。二人ともオランダ語の達人だ。英会話は森山栄三郎のほうができたが、いずれにせよ、通詞は言葉を操る職能人と、見下される風があった。

海も暮れきる

尾崎放哉